

二〇三三年八月二五日

湯殿より窓越しに見ゆ月涼し
腰深く落として処暑の太極拳
稔田の鹿の狼藉憎みけり
石庭の一水白く秋立ちぬ

なつき
素 秀
千 鶴
む べ

二〇三三年八月二四日

扇風機祈る老母の背に向ける
なぞへなす谷戸の棚田の稔かな
雷雨来て地上の熱を冷ましけり
喧嘩負け西瓜にかぶりつく子かな
雨やんだよと告ぐるやに法師蟬
秋茄子の畑潤して紫雨上がる

あひる
素 秀
満 天
なつき
明日香
きよえ

二〇三三年八月二三日

参礎を塞ぎし風の乱れ萩
太陽光パネルが埋む枯野かな
雨意兆す風に騒がしねこじやらし
葎戸に秋風通ふ薬師堂
愛犬のつかずはなれず露まみれ

ぼんこ
明日香
せいじ
もとこ
澄 子

二〇三三年八月二二日

ペディキュアを塗られ微笑む生御魂
遊ばれよ京の残暑を覚悟して
残暑にも負けず青春切符旅
傘立てに日傘犇めく診療所

澄 子
もとこ
なつき
智恵子

二〇三三年八月二一日

世話役は老人会や地藏盆
先頭を行く老骨の夏帽子
本殿の鈴緒取り替へ涼新た

こすもす
うつき
ぼんこ

二〇三三年八月二〇日

配達便受取りねぎらふ残暑かな
風渡る葉擦れの稲の香りかな
朝粥でもてなす京の残暑かな

満 天
あひる
もとこ

二〇三三年八月一九日

漆黒の闇の高きに大花火

たか子

毎日句会みゆる選・二〇三三年八月二七日